壊れものとしての人間

――活字のむこうの暗闇――

大江健三郎

講談社

発行者——野間省一
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一
郵便番号　一一二
電話——東京（九四二）一一一一（大代表）
振替——東京三九三〇

壊れものとしての人間

大江健三郎

昭和四五年二月一六日——第一刷発行
印刷所——豊国印刷株式会社
製本所——藤沢製本株式会社
定価——四二〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

© Kenzaburô Ôe 1970 Printed in Japan

0095-123754-2253 (0)

目次

出発点、架空と現実　5
言葉が拒絶する　33
パンダグリュエリヨン草と悪夢　63
核時代の暴君殺し（タイラニサイド）　93
作家にとって社会とはなにか？　121
個人の死、世界の終り　157
皇帝（ツァー）よ、あなたに想像力が欠けるならば　185
もはやいうことはありません

装幀＝栃折久美子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

壊れものとしての人間

——活字のむこうの暗闇——

出発点、架空と現実

読書による経験は、言葉の正統なる意味あいにおいて、経験であるのか、読書によって訓練された想像力は、現実への想像力たりうるのか？　ぼくはこのふたつの問いかけを、自分自身にむけて発し、そして当然それにこたえなければならない。それはぼくがはじめて活字の呼びかけに反応した幼年時から、ぼくが狂気にとらえられて活字を喪なうか、あるいは死をむかえるときまで、ぼくのもっとも肝要な部分で発せられ、答えられつづけなければならない命題である。ぼくは錯誤か小っぽけな気まぐれによってしか犯罪にたぐいすることをおかさなかった。オーストラリア北部の原生林をジープで疾走して、バッファローと呼ばれる水牛の糞の山にのりあげたことはあるが、冒険旅行に出るというほどのことはしなかった。他人を暴力で凌辱したことも、戦場に出たこともなかった。それでいて読書による経験のうちに、右にあげたすべてのことより以上

のものがふくまれていると感じる。またぼくは現実にむかってゆく自分の想像力の根源に、読書によってきたえられた想像力が、決してもろくもぐにゃぐにゃでもない確かな実体として存在していることを感じないわけにはゆかない。しかもなお、読書による経験は、読書による経験にすぎない、読書のうちに自分の生命を昂揚させる想像力は、現実を認識し行動をおこす者の想像力とは別の根をもっている、という意識をもまた、すっかりふりすててしまうことはできない。

幼年時に、それは戦いのさなかのことだ、ぼくの固定観念のひとつは、まずしい数の書物の小さな積みかさなりの上に毛細血管をはびこらせて生きていた。そしてそれがぼくの挙措動作を不自然にし、ぼくに身のまわりの事物、人間との適応を難かしくさせ、ぼくは吃った。

ぼくはじつにたびたび、次のように考えては、現実についてのある情報、または現実そのものの前で、ためらいとともに立ちどまってしまったのである。これは現実でない、なぜならこうしたことが書物にのっているのを読んだことがあるからだ、あのようなことは実際におこりえない、なぜならそうした全体が活字で印刷されているものを見たことがあるからだ。ぼくはいくたびこのように考えては、新情報をつたえる幼な友達を疑わしげに拒んだことだったろう。新しい奇怪な現実の前で立ちどまり背後を向いてしまったことだったろう。戦時の深い森の奥の、まことに罌粟つぶのようにも小さく不確実である幼年時を、なんとか生きのびているぼくにとって、書物

は現実への吊り橋ではなく、その逆に、吊り橋を崖の下の暗黒にむかって斬りおとす斧であった。

まことに幼年時のぼくにとって書物のうちなる事物、人間はみな架空のものだったのだ。異邦人、猛獣はもとより、ビルディング、汽船が架空だった。海すらが架空であった。戦争の末期に、すなわちぼくが自分の幼年時と訣れようとするころになって、ぼくの住む谷間をかこむ両側の山のあいだの、狭く限られた空を飛びこえて、われわれの地方の中心都市を焼きにゆく敵国の爆撃機のみが、現実化した飛行機であった。バター、牡蠣、サラダ菜が架空だった。麺麭すらも架空だった。教師たちは、ぼくや同級生たちがあまりにも教科書のうちなる事物を知らないので、ついには活字で印刷された事物の名前と、現実においてそれに照応するものとの identification をあきらめた。生徒たちは困惑することなしにそれにしたがった。誰が実物のスサノオノミコトを思いえがくべくつとめるだろう？　檸檬もコオフィも神話の時代の無限定な広がりのうちに放置しておくがいい。檸檬を見たことのある子供もいるにはいたが、それは紡錘形をしたレモン・イエローの物体ではなかった。それは青と黄色の斑の、歪んだ酸っぱい果実のはずだった。にがいコオフィ、そういうものがありうるだろうか、闇で手にいれてひそかに小量ずつ大人たちの飲んでいるコオフィとは、濃褐色の罐にはいっている粉末のときにすでに甘ったるく、いくぶん焦げくさいだけだと、そのような貴重品の味をみる小さなコソ泥的勇気をそなえた級友が証言するだ

けで、にがいコオフィとは、もっとも判読しがたい言葉の謎にかわったのである。

ぼくはおそらく谷間のすべての子供たちに読まれて破損しかつふくれあがった一冊の漫画本のひとつの情景をいまなおくっきりと思い浮べることができる。朝寝ぼうのブタを眼ざめさせるために仔グマを指導者とする小動物たちが協議する。ネズミが、芯をくりぬいたキャベツのなかにはいって、寝台のブタを誘いだす、キャベツはひとりで転がるように見え、食いしんぼうのブタは思わず寝台を離れてしまう。まず、寝台が架空だった。そして、空色の卵のように見える漫画のキャベツが架空の物体だった。ぼくがその空色の魅惑にみちた物体にあまりに熱い憧憬を示したので、ぼくの母親は、この世のものとも思えぬその空色の球体は、われわれの谷間の畑にも育っている甘藍にほかならない、と教えてくれたが、ぼくはその identification によって喜ぶどころか、不当に恥かしめられたと感じた。モンシロチョウの幼虫の住み家であり、潰した青虫とおなじ匂いのする甘藍が、この漫画のクライマックスを支配する輝やかしいキャベツたりえようか？　ぼくは現実の甘藍を拒否し、架空のキャベツに夢想の核(コア)をおくことを選んだのである。

父親の不意の死が、もっとも鋭く、書物のうちなる世界と、現実生活とのあいだの連絡路をたちきる役割をはたした。父親の死は、ぼくが活字で読んだかぎりの、いかなる死とも似かよっていなかったのである。父親の死がぼくの世界をおしひろげて、ぼくは様ざまな他人と、それも大

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人たちと父親の死について話しあったが、ぼくはおたがいのつかっている「死」という言葉が、じつは同一の実体をはらんでいないことに気づかざるをえなかった。ぼくは他人のもちいる死という言葉が、書物のうちなる死という活字とおなじく、架空な言葉であるように感じた。父親の死の後、しばらくたっておなじ谷間の、しかし谷間の一般的な生活者とは少しことなった暮しをしていたところの、ある初老の男が死んだ。かれは密殺するはずの数頭の牛を、もちろん非合法に調達した船で阪神地方に運ぶべく深夜に瀬戸内海を航行していて、行方不明になったのである。若い女がひとりその変死した男の家に残り、いつも軒先にたたずんでいて、誰かれから慰さめの言葉を受けるたびに、事故の顚末をひとくさり話しては号泣した。ぼくはそこでも、死という言葉が、それぞれの口から発せられはするがひとつにとけあうことはなく、むなしくすれちがって消えさる気配をかぎつけた。実は、このぼくひとりが、まさに実体をそなえた、架空でない言葉としての死という単語を使って、彼女と語りあえる筈だったのである。しかし絶望した若い女は、ある日ひとしきり農婦たちを相手に泣きわめいたあと、農婦たちが落葉あつめに疎林をさして去ると、静かに傍聴していただけのぼくを、すなわち汚ならしい桑の皮の繊維製半ズボンに憐れにも日の丸を染めだしたランニング・シャツをつけた谷間のガキたるぼくを、世にも恐しい眼で睨みつけ暗い土間へ入りこんで行ってしまった。ぼくの眼はその時分に、おそらくはヒステ

リー質の視神経異常をしばしばおこしていた。腹をたてたり、または、ただひとつの対象をじっと見つめていたりすると、すべての物体が遠方にひきさがり縮小されて見えてくる。そういうときぼくは、ふだんの視覚の場合にも、ぼくが一本の樹木を見て、その大きさと位置について感覚をもつ、その感じとりかたが、他の人間がおなじ樹木を見ていだくイメージと、どうして同一であると信じる根拠があるだろう、と疑った。しかしそのように考えはじめれば、名高いヨーロッパの舞台の台詞そのままに、人は気狂いになってしまうほかない。そこでぼくは、書物のうちなる架空の言葉を、架空なままに受けとって楽しむことで、自分としてはどうにもうまく関係づけのできない現実の事物から遠ざかることにしたのである。ぼくが深い森の奥の谷間で育ちながら、樹木、草花、昆虫、魚のたぐいについて、いわば教養派的な知識しか持っていないのも、おそらくはそのせいなのだ。ぼくは内田恵太郎博士の採集になる、わが国の地方別の魚の異名を活字として読み、幼年時に弟と追いかけた淡水魚らしいものをつきとめる。しかしぼくの内部で具体的なかたちをとりはじめる、その言葉、たとえばイワナやヤマメのぼくの地方の異名の実体は、ぼくが幼年時の小さな傷だらけの掌に握りしめた魚のそれではなく、魚類図鑑を永いあいだ見つめることによってのみ獲得したところの実体なのである。

書物のなかの言葉を、現実世界の事物にひきよせることなしに受けいれる習慣ができあがる

と、それはむしろ習慣などというより、谷間のしばしば兇暴な子供らの社会で、チビの変り者あつかいされ私刑を加えられかねない、ひとつの危険な「生き方」を選んだ、ということなのであるが、ぼくは現実生活とまったくかけはなれた内容をはらむ活字からも、現実に事物あるいは人間がぼくに物理的な力をくわえると同じ、具体的な衝撃を受けることになった。身のまわりの事物よりも、書物のなかの事物が、より重く現実的に実在する瞬間を、ぼくはくりかえし経験することになったのである。森と谷間とが架空になり、書物のなかにのみ、まぎれもない現実が、ぐっと頭をもたげて、ぼくを領有する瞬間。

ぼくは薪をつめこんで床の下の恐しい暗がりをかくしてある縁側に腰をおろして海野十三の小説を読んでいた。それは雑誌あるいは子供むけの新聞の連載の一回分のみで、どのようにしてその雑誌または新聞の一号分がぼくの手にはいったのかは忘れてしまったが、その前後の号を手にいれることは不可能であったことをはっきり覚えている。活字がぼくにつたえた情報、あるいは、ひとつの事物の実在、それは、一種のロボットで、そいつはまことに神出鬼没である。ロボットは自分自身に猛烈な回転運動のエネルギーをあたえ、回転が極点にたっするとロボットは時空を超えてあらゆる任意の場所に到達することができるのである。ぼくは特にそのロボットが極点で回転する円盤のごときものにかわる、という表現に強い一撃を受けた。ぼくは甚大な恐怖にとら

えられて、いま自分が坐っている縁の下の暗闇にすら、その猛烈な速度で回転する円盤がひそんでいるかもしれない、と考えた。薪束などをつめこんで、床の下の暗闇が見えないようにしておいても効果はないのだ。その奥の暗闇には回転するロボットがすでに入りこんでおり、たちまち薪束をはねちらしてあらわれるにちがいないからだ。恐慌状態におちいり、身動きもできぬぼくを苦しい長い時間のあと、どこかから戻ってきた母親が見出して、活字で書かれていることはツクリ話にすぎない、本当のことではない、といってぼくを勇気づけようとした。しかしぼくには、この現実生活と、活字のうちなる世界とでは、事物の実在性と架空さが、とくにどちらにのみあるというのではないと感じられていたのであるから、ぼくは自分のおちいっている深くまっ暗な恐怖の穴ぼこにおいてひとりぼっちで震えつづけるほかはなく、母親の存在とその言葉とは、無益な幻のごときものにすぎなかったのである。いま考えてみても、幼年時のぼくが、どのようにして、自分が活字のむこうに見出してしまった暗闇の深淵の恐怖から回復することができたか定かでない。現にいまこのように生き延びて自分の幼年時のもっとも鋭い危機について回想している自分がここにいる、というほかに、ぼくはいかなる脱出証明をも提出しうべくもないのである。

幼年時の森にかこまれた谷間での生活において、ぼくは活字の世界の奥ふかく、あるいはその片隅に、現実生活の環境へとひらいている通路があることを認めなかった。ぼくは架空の世界にはいりこむことで、現実生活においては拒まれているところの、情念の緊張をあじわった。しかしそこからもちかえった知恵によって現実世界の事物を解釈したり、関係づけたりすることを試みることはなかった。橋はたち切られていた。現にもしぼくが書物のなかの話し言葉をもちいて谷間の子供仲間と話したとしたら、ぼくはまず五体健全ではいられなかっただろう。もっとも、暴力的な制裁あるいは仲間はずれへの恐怖よりも、もっと強く大きい障害はぼくの羞恥心および、われわれよりほかの者たちの言葉を、標準語すなわち教室での苦役の手段となる架空の言葉としていることへの憤怒であって、ぼくはこんりんざい、そのような言葉を使用してみる意志はなかった。

それではぼくにとって谷間の歴史というものはありえなかったのか？　文字で書かれたものをすべて自分の現実生活にかかわりのない架空のものとして拒む以上、あるいは、架空のものと認めたうえで熱中するよりほかのことはしない以上、もしぼくの村または集落の歴史を書いた文書が手に入ったとしても、ぼくはそれを自分をふくむ谷間の現実生活の歴史とみなすことを、まともな実感とともには、おこないえなかっただろう。確かにぼくは謄写版で刷った村の編年史など

が古戸棚にあるのを見出したりしてもいささかの興味もいだくことがなかった。ぼくは谷間の言葉で、自分の口から村の歴史を語る人物の傍で、それに耳をかたむけていることをのみ望んだのである。そのような言葉は、つねに不正確であり、時と場所の混乱にみちており、不均衡にある一事件のみを拡大して語るものであったが、それが活字によって印刷されたものでない、という唯一の理由によって、ぼくはその言葉を信じたのである。しかもあきらかに矛盾を見出し、混乱になやまされつつ、それらの矛盾、混乱をそのまま受けいれることによって、だからこそこれは架空のものではない、現実そのものなのだと信じたのであった。そしてそのような矛盾と混乱にみちているからこそ、手のこんだ房かざりのようにも厚ぼったく重い手ごたえのある現実世界のタテの流れに自分も谷間のひとりのガキとしてくみこまれていると感じ、父親の不意の死以来、ぼくをつかまえて離さぬ固定観念となった死および狂気の不安から、自分の赤裸の心と肉体を剝ぎとることができたのである。とくに幼年時のぼくが、語られる言葉の時間的な矛盾、混乱に気づきながら、まことに反・論理的にも、このような混乱があるからこそこれは架空ではないのだ、自分の住むこの谷間の現実なのだ、と信じこんでいたこと、その確信のぼくにもたらした濃い安らぎの感情を、いまなお横隔膜のあたりの肉体的な感覚において思いだしうることは分析の対象としていくらかの意味を有するかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c